

# 教員の資質能力の向上を図る人材育成の在り方 —OJTを通じた教員の授業力向上—

教育実践力高度化コース

17AD004

加藤 雄大

【指導教員】 大澤 利彦 河村 美穂 尾崎 啓子

【キーワード】 授業力向上 校内研修 働き方改革 マインドマップ

## 1 はじめに

グローバル化やAIが進展する世の中で、将来なくなるかもしれない職業が多数あると言われている。しかし、教師という職業はなくなる、なくなつてはならないものである。教師がAIに勝る能力は「ないものを見る力」だと考える。人の気持ちや物事の本質は目に見えないため、AIがそれを認識し正しい判断をすることは難しい。一方、教師は子供の気持ちや思いを理解し子供に合わせた指導や対応ができる存在である。どんな時代になつても人は人と人のかかわりやつながりの中で育つということは変わらない。激動の未来を生きる子供たちに自立して社会を生き抜いていく力を身に付けさせるには、教師も「学び続ける集団」の一員として変わり続け、授業力をはじめとする高い資質能力をもった魅力ある教師にならなければならない。

平成27年12月にまとめられた「埼玉教育の振興に関する大綱」では「人材の育成に向けた七つの根本的な方針」が示されており、その中に「教職員の資質・能力の向上を図る」ことが明記されている。生徒に相対する教職員の基本的な姿勢と指導技術の重要性が説かれ教員は時代の変化に対応し得る資質能力の向上に努めるよう研修の在り方についても考えなければならない。

また、「第二期埼玉県教育振興基本計画」の基本目標Ⅲ「質の高い学校教育を推進するための環境の充実」でも施策の一つとして教職員の資質能力の向上が示されており、優れた教職員の確保や教職員研修と調査研究の充実などの取組が行われている。

本研究では、校内研修を中心に既存の取組を生かし、OJTの手法を取り入れ、教職員の資質能力の向上を図ることをねらいとしている。OJTとは、人材育成の概念の一つで、普段の学校での職務全体を通して必要な知識・技能などを身につけさせることを指す。教職員の年齢構成の不均衡化等により、ベテラン教員の知識・技能を若手教員に継承する取組や、年齢・経験を問わない双方向の教え合いと学び合いによる人材の育成が求められるようになっている。

## 2 本校の現状と課題

本校は埼玉県南東部に位置し、全校生徒594名、18学級（うち特別支援学級1学級）の中規模校である。近年、駅周辺の開発により、住民増加が著しく、生徒数は年々増加している。教職員（校長・教頭・教諭・養護教諭・事務主査の34名）の年齢構成は20

代（13名）が最も多く、次いで50代以上（9名）となっている。キャリア段階で見ると、1～10年（17名）が最も多く、11～20年は5名しかいない。また、臨時的任用・再任用教員は合わせて5名いる。そして、本校での勤続年数は1年（12名）が最も多く、ほとんどの教職員が本校に着任してから5年以内である。5年目の教職員の多くは新採用から5年が経つ者で、次年度以降は他市町村への異動が確実である。このような状況の中で、数少ない中堅教職員が多くの若手教職員を育てていくという人材育成ができにくいことは予見されており、教職員の資質能力の向上はますます重要性を増している。

【本校教職員の年齢構成（人）左：H30 右：(H29)】

20代	30代	40代	50代
13 (14)	8 (9)	4 (3)	9 (10)

【本校教職員のキャリア段階（人）左：H30 右：(H29)】

1～10年目	11～20年目	21年目以上	臨時的任用	再任用
17 (18)	5 (1)	7 (8)	4 (5)	1 (4)

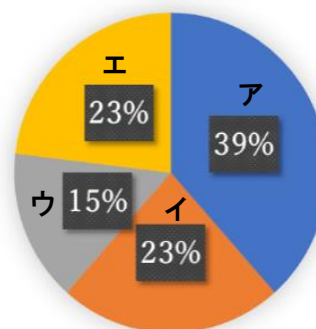
【本校教職員の本校勤続年数（人）左：H30 右：(H29)】

1年	2年	3年	4年	5年	6年以上
12 (14)	7 (6)	5 (4)	1 (3)	3 (7)	6 (2)

また、新しい取組に挑戦することに消極的な教職員もいる。「学び続ける集団」をつくり上げるためには、学校が一枚岩となって研修に取り組む必要があるが、実施内容や時期・時間など質的・量的な面で負担感を抱いている教員が多いこと、教え合い学び合いが必要だと思っても、「多忙」を理由に実施できない状況にあることなどの課題がある。「学び続ける集団」の形成のためにはこの課題を解決しなければならない。以下は、平成29年6月に実施した①～③についての本校教職員へのアンケート結果である。（23名回答：複数回答あり）

（通常の授業を互いに見合う取り組みについて）

① ふらっとさんかん\*1



ア現状で十分

（これ以上はなかなか難しい）

イ同じ教科だけではなく他教科の先生方にも参観していただくなど、参観者を増やしたい。

ウ授業後（参観後）に、意見交換をする時間を十分に確保したい。（もっと意見交換したい。）

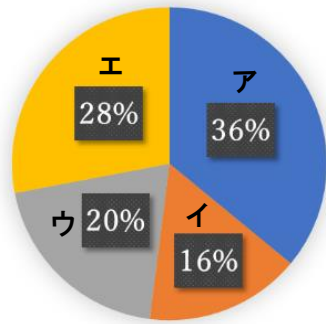
エ短時間で意見交換できるように、ふらっとさんかんメモの内容を工夫したい。

※1 ふらっとさんかん

教科、学年問わず他の先生の授業を参観し、授業で参考になった点や、聞いてみたい点をメモに残し意見交換を行っている。目標は年間30回以上。

- ・メモをもらうだけで参考になる。自分も丁寧にメモを書いて渡せるようにしたい。
- ・積極的に参観したいが時間がない。(空コマや分掌の関係)
- ・参観者がポイントの目的をもって臨むことで、時間的な負担もなく実のあるものになるのではないか。
- ・相手の先生方も忙しいので、こちらからはお願いしにくい。
- ・他教科の指導の視点で意見をいただくと教科という枠にとらわれず、授業力向上につながるのではないかと。

②一人一回の研究授業※2



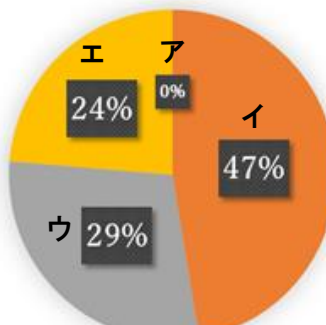
※2 一人一回の研究授業

本校では1年間で必ず一回は研究授業を実施することとしている。

- ・同教科の先生は授業にも研究協議にも参加できる体制作りが必要。
- ・働き方改革の中でこれ以上増やすのはきつい。
- ・授業で見てほしいポイントをしばしば意見交換も短時間でできるのではないかと。
- ・「学び」を増やすには互いの授業を見合うことも大切だと考える。
- ・自分自身の授業力を客観的に見ていただき、向上につなげられたらうれしい。
- ・できるだけ多くの先生方に見ていただきたい。間違いなく他教科の先生方から学ぶことが多いと思う。

(校内研修会に限らず、今後どのような研修会に参加したいかについて)

③研修会



ア小学校との連携した学力向上への取組の実践例を知りたい。  
 イ自身の専門教科での学力向上のための具体的な実践例を知りたい。  
 ウ主体的・対話的で深い学びについて、もっと深く学びたい。  
 エ教科にとらわれずに学校・学年で行う学力向上の取組の実践例を知りたい。

- ・若手がベテランの先生の実践を学ぶ機会
- ・技術家庭科としての主体的対話的で深い学びについて
- ・効果的な課題の設定、発問の工夫
- ・道徳、総合的な学習の課題の実践例
- ・関心、意欲を高める授業、主体的に学ぶ授業、言語活動を取り入れているがどこまで得点に結びつくのか。(問題を解くだけの授業にしたい) 良い授業とテストの点は共に向上させられないのか。
- ・カウンセリングの手法を生かした生徒指導について、定期的(学期に一回は)に必要と考える。
- ・問題を抱える生徒の指導検討会
- ・家庭学習(効率の良い宿題の出し方)

アンケートの結果から、研修に対する先生方の「負担感」が高いことが分かった。一方で、「もっと授業力を高めたい」「よりよい教育活動をしたい」という思いをもっていることも知ることができた。先生方一人一人が本校の子供たちの課題と向き合い、変容させるべく、日々努力されていることが伺えた。教

員の資質能力の向上を図るためには、「学び続ける集団」をつくらなければならない。校内研修の充実のためには、先生方が抱える「負担感」と向き合い、その改善を図りながら「もっと授業力を高めたい」「よりよい教育活動をしたい」という「向上心」を教職員全体がもち、その実践のために何から始められるか考えることが必要である。それができれば、OJTを通じた先生方の授業力向上につながり生徒へ還元できると確信する。

3 研究の目的と仮説

(1) 研究の目的

以上のような本校の現状と課題から、授業力向上を目指した教職員の人材育成の在り方の明確化を図るために、校内研修や既存の取組を生かしたOJTの方途を明らかにすることを目的としている。

(2) 研究の仮説

校内研修や既存の取組を生かしたOJTの中で、次のような手立てをとれば、授業力向上を中心とした教員の資質能力の向上を目指した人材育成の在り方を明確にすることができ、「学び続ける集団」を構築することができるであろう。

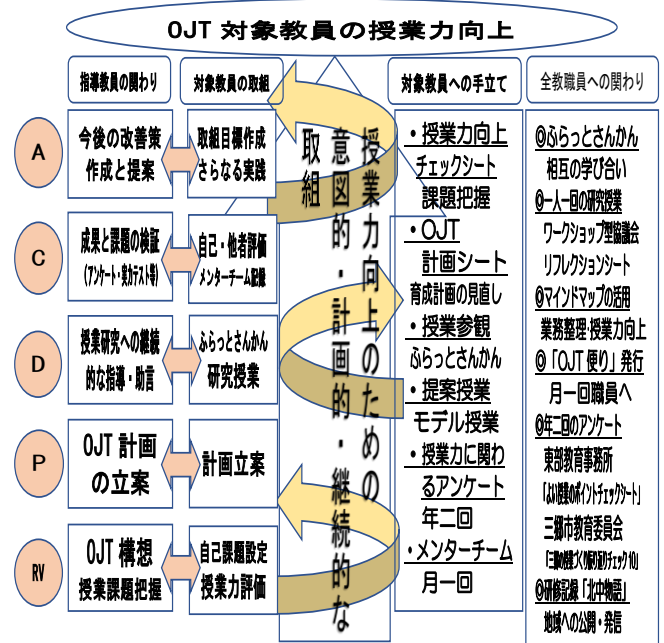
○校長の人材育成計画のもと決定したOJT対象教員※3の育成に、RV-PDCAサイクル※4により意図的・計画的・継続的に取り組む。

○全教職員への関わりについての具体的な計画としては、既存の取組をより効果的なものに充実させる。(ふらっとさんかん、校内での研究授業、研修会、マインドマップの活用、5分間学習)

※3 OJT対象教員：自己の授業課題をもとに、年間を通してOJTに取り組み授業力向上を図る教諭

※4 R (Research:調査)・V (Vision:構想) →P (Plan:計画) →D (Do:実践) →C (Check:検証) →A (Action:改善) の5段階を繰り返すことによって取組を継続していくプロセス

4 研究の構想



OJT対象教員の授業力に関わる実態

## (1) 校内研修「プロジェクトK<sub>\*5</sub>」の推進

\*5 プロジェクト K: キーワードである北中学校・鍛える・向上・協働・改革・継承の頭文字 K を意味する。プロジェクト K の重点施策として、以下の①～③の取組を行う。

### ①既存の取組の充実

#### ア 教員の取組 (前述のアンケート結果より)

##### ・ふらっとさんかんの充実

時間的な負担感を解消するため、教科ごとに授業参観週間を設定し、該当した週は時間割を入れ替えるなどの工夫をし、授業を参観できるようにする。また、参観シートの工夫も行い、効率よく意見交換できるようにする。

##### ・一人一回の研究授業の充実

研究協議会は、ワークショップ型協議会で行う。(研究協議会の充実、批判だけではない建設的な話し合いにより先生方の意欲を高める。) また、リフレクションシートを活用し、話し合いのポイントを整理する。

#### イ 生徒の取組

##### ・5分間学習<sub>\*6</sub>の見直し(名称 MKD: みんな必ずできる)

\*6 5分間学習: 帰りの会直前の5分間を利用して、基礎基本の定着を目的とし、漢字や英単語の書き取り等に取り組んでいた。

目的を基礎学力の向上から、「できた喜びを味わわせる」こととする。花まる学習会代表の高濱正伸(2014)は「わかっちゃった!の快感を味わった子供は、勉強が大好きになる。」と述べている。やらされるのではなく、自分の力で解き明かす快感をたくさん経験した子供は学習に対しても前向きに取り組むことができ、学力の向上につながる。内容は生徒の心に火をつける取組(パズルやクロスワード形式)へと改善する。一日の終わりに、何か一つでも「できた」という喜びを感じることで、自己肯定感を育み、自信が生まれるのではないか。そうすることで生徒のやる気が高まり学力向上へとつながる。

### ②若手教員の育成

#### ア OJT 対象教員の育成

OJT 指導教員が校長の人材育成計画のもと、3~5名を決定し、RV-PDCA サイクルにより OJT 対象教員の課題を把握し、目指す教師像の実現のため、意図的・計画的・継続的に OJT を推進する。

#### イ メンターチームの活用

月一回、放課後を利用し、採用3年目までの若手教員を対象に開催する。内容は教材研究・授業・学級経営等に関する悩みなど、自分たちが知りたいことを学び合える場とする。指導教員は若手教員が課題把握・課題設定、手立ての立案、改善策等が記入できるアクションリサーチシート(岩手県立総合教育センター2013をもとに作成)を活用し、指導に当たる。

#### ウ ベテラン教員のサポート

本校は、再任用教員も含め21年目以上の先生方が多い。若手教員の育成にはこうしたベテランの先生方の知識や経験が必要である。ふらっとさんかんやメンターチームを通して若手とベテランの交流を促進していきたい。(特に自己評価シートキャリア段階

## ⅡⅢ教員)

### ③マインドマップの活用

マインドマップはトニー・ブザン(Tony Buzan)が提唱した思考・発想法の一つで、頭の中で起こっていることを目に見えるようにした思考ツールのことである。トニー・ブザン(2013)は「マインドマップは放射思考を図で表したものだ。放射思考とは、人間の脳が思考し、アイデアを生み出す過程のことである。それを外面化して記録することで、マインドマップは頭の中で起きていることを鏡のように映し出す。このようにして放射思考が再現・反復されると、脳の自然な働きが強化される。」「マインドマップは思考全般に使えるツールで、考えていることを視覚化して図に表す。『脳の万能ナイフ』と称されるマインドマップは、あらゆる認知的機能に応用でき、記憶、創造性、学習の三分野でとくに大きな効果を発揮する。」と述べている。また、思考の過程について「マインドマップは脳と同じように、中心に描いたイメージから外側に向かって枝状の線(ブランチ)を広げ、その先からさらに次の階層へとつなげていく。こうすると書き加えたアイデアからさらなるアイデアが生まれやすくなる。また、すべてのアイデアが相互に関連付けられているので、脳は連想を働かせて理解を深め、想像を飛躍させることができる。」としている。このことからマインドマップの活用は学校現場においてあらゆる場面で効果が期待できる。具体的に以下の場面での活用を提案する。

#### ア 生徒の学力向上

生徒の思考の過程がわかるのでどこでつまづいているのか把握しやすい。また、記憶術としての効果も期待できるので、試験勉強や単元のまとめとしての活用法がある。さらに、創造的思考を育てることも活用できる。様々なアイデアをマインドマップに描き表すことで新しい結びつきや発想を考え出すことができる。これは授業だけではなく、道徳や特別活動にも有効である。

#### イ 教員の業務整理

目指す教師像や生徒に身に付けさせたい力、学級経営方針等をマインドマップに描くことで、目標のイメージが明確になり(可視化される)毎日の具体的な取組へとつながる。また、教材研究や学級経営、生徒指導、保護者対応、教育委員会等へ提出する調査・報告書の予定も可視化することで見通しをもって取り組むことができるようになり、先生方の「負担感」の軽減にもつながる。

### (2) 研修記録「北中物語」の地域への公開・発信

本校の教育活動(校内研修や研究授業、各行事での取組)の様子をこれまでのホームページや学校だよりでの公開・発信に加え、研修記録「北中物語」として冊子にして地域へ発信することで学校と地域のつながりを強化する。また、実践した教職員の名前を明示することで、みんなで作る意識が芽生え、北中学校で働くことに対する誇り・プライドを持つことができる。この取組を通して、学校・地域・家庭がビジョンを共有し、チーム学校として魅力的な生徒の育成に取り組むことができる。

### (3) 年二回のアンケートの実施・活用

授業力向上のために、マインドマップについてのアンケート(11月)と、東部教育事務所が作成したよい授業のポイント-授業づくりのポイント「チェックシート」、三郷市教育委員会が作成した「三郷の授業づくり」振り返りチェック10(7月と11月)を実施し、先生方の授業に対する意識を高めるとともに、結果を分析し、授業改善を図る。結果は、東部教育事務所管内の他の中学校との比較や三郷市教育委員会との連携などにも活用していく。

### 5 期待できる成果

OJTを通して希薄になりがちな教員間のコミュニケーションと同僚性の構築が図られ、「学び続ける集団」がつけられる。そして授業力の高い魅力ある教員が増え、学校力の向上、生徒の学力の向上につながる。

### 6 研究計画

年度当初に、校内研修の計画を作成し、ふらっとさんかんや一人一回の研究授業は随時実施していく。また、マインドマップ研修を実施し、先生方へ周知する。年間を通してOJT対象教員への取組をRV-PDCAサイクルにより実践する。月一回のメンターチーム、OJTだよりの発行を行う。7月と11月には授業力向上に関するチェックシートを行い、意識の向上と授業改善につなげる。

### 7 研究の実際

#### (1) 今年度の校内研修実施内容

日時	研修内容
5/9(水)	①今年度の学校研修課題について ②教科会・評価評定の付け方の確認 ・教育支援担当訪問授業者の決定
6/4(月)	①ふらっとさんかん、一人一回の研究授業の推進について ②教科における「見方・考え方」について ・各教科等での「生徒に身につけさせたい力等」の検討・確認
7/17(火)	小中連携合同研修会事前打ち合わせ ・本校中学校区(本校、小学校3校)の研修担当者による打ち合わせ
7/20(金)	①アンケートの実施 アよい授業のポイント-授業づくりのポイント「チェックシート」 (東部教育事務所作成) イ「三郷の授業づくり」振り返りチェック10 (三郷市教育委員会作成) ②「プロジェクトK」教科指導資料の入力 ア:生徒に身につけさせたい力 イ:どうなったら身についたと判断できるか ③分科会の確認
8/24(金) AM 校内研修 PM 小中連携合同研修会	AM ①教育課程(総則・道徳) ②埼玉県学力・学習状況調査の結果分析 ③新体力テストの結果分析 ④マインドマップ講習・演習 ⑤AED講習 PM ①教育相談研修

	②学力向上に向けて ・全体研修「教員の授業力向上のために」 ・分科会 A 国語・社会 B 英語 C 数学・理科 D 道徳 E 生徒指導情報交換会
9/4(火)	小中連携合同研修会のまとめ
11/5(月)	教育支援担当訪問について ・研究協議会の進め方「学びの共同体」 ・指導案検討会(分科会ごと)
1/24(木)	教育支援担当訪問に向けて ・指導案検討会(分科会ごと) ・ワークショップ型協議会の進め方
2/5(火)	教育支援担当訪問(東部教育事務所) 研究授業(国語・理科・美術) ・分科会(ワークショップ型協議会) ・全体会

#### (2) 具体的な実践内容

##### ①既存の取組の充実

###### ア ふらっとさんかんの充実

授業時間数の関係で、多くの授業を参観し合うことは難しかった。限られた時間の中で、50分間の授業の「導入」「話し合い活動」「発表」「まとめ(終末)」等ポイントをしぼって参観することができた。参観記録シートを活用し、教員間での助言・指導ができた。また、教材(授業プリントや実物資料)の共有もできた。

###### イ 一人一回の研究授業の充実

全教員が一回以上の研究授業を行った。授業力向上を図るために、教科会で「生徒に身につけさせたい力」「どうなったら確かな学力が身についたと判断するか」を検討し、冊子にまとめた。指導案作成の際の参考にするとともに、普段の授業でも意識して取り組んだ。また、「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」につながる場面を指導案に明記し、授業を参観する際のポイントとした。定期的に教科会を開き、授業について検討することにより、教員間でコミュニケーションをとることが増えた。夏季には小中連携合同研修会を行い、本校中学校区の三校の小学校の教員と教科指導等で情報交換を行うことができ、指導についての共通理解、教材の共有等の連携を強化することができた。

##### ②若手教員の育成

###### ア OJT対象教員の育成

OJT指導教員(研修主任)が校長の人材育成計画のもと、3名のOJT対象教員(2,3年目、いずれも学級担任)を決定した。RV-PDCAサイクルにより対象教員の課題を把握し、目指す教師像の実現のため、意図的・計画的・継続的にOJTを推進した。指導教員によるふらっとさんかんの計画的な実施や、職員室での教材研究や学級経営等へのアドバイスを積極的に行った。また、対象教員は、月ごとにアクションリサーチシートに目指す教師像、課題や取組内容、成果等の分析の記入を行い、指導教員はそれに対する指導・助言を行った。



## ・アクションリサーチシート

学校のゴール	「生きる力を育み、豊かな心と確かな学力の伸長を図る授業の創造」	
自分のゴール R (調査) V (構想)		
段階	実施内容	自己記入欄
P (計画)	①実態把握・課題設定 具体的なゴール像	RV-PDCA サイクルをもとにOJT 対象教員が記入する。
	②手立ての立案	
	③実践計画の立案	
D (実施)	④実践	
C (評価)	⑤分析・考察	
A (改善)	⑥改善策をまとめる	
全体の振り返り		

OJT 対象教員が作成した 5 月と 11 月のアクションリサーチシート (一部) を比較してみた。

自分のゴール像	①与えられた課題に対して、既習事項をうまく活用し、論理的に解決できる。 ②自ら発展的課題を模索し、解決しようとする。あるいは発展的課題を解決できる。 ③基礎、基本的な数学的知識、技能の習得	
実施内容	5 月	11 月 (①②③は自分のゴール像)
①実態把握・課題設定	・自分の解答を数学的な言葉を用いて説明できない。 ・乗法公式を使えない。	・上位の生徒は“NEW リトル”で①をクリアしている。中位も自分で解決はできる。下位が解決できない。 ・②について、上位はクリアしている。数学を解ける喜びを感じている生徒は、下位でも取り組もうとしている。解ける喜びを全生徒に感じさせることが課題。 ・③について、下位の生徒が難しい。
具体的なゴール像	・自分の解答を数学的な言葉を用いて説明できる。 ・基本的な因数分解ができる。	・①について、数学的な“ことば”を利用して論理的に問題を解決できる or “NEW リトル”で説明できる。子どもが解説をして教員が見守る or つけたしをするような授業。 ・②について、発展、応用問題の正答率がよい or 上昇した。 ・③について、入試・定期試験大問 1、音声問題は解ける。

実施内容①実態把握・課題設定、具体的なゴール像の項目を見ると、記述量に大きな変化が見られた。特に 11 月は、自分のゴール像①～③の項目に対応した実態把握・課題設定がされている。具体的なゴール像も同様に、より具体的な記述になっている。

実施内容	5 月	11 月
④実践	・既習事項の言葉の意味を、正確に答えられない生徒が多かった。	・子どもたちに発見させるような授業をすると、 <u>苦手な子どもでもできる子に聞きながらなんとかやってみようとする姿勢が見られた。</u> ・ <u>頭の中の引き出しを増やすことを子どもたちに説いた。</u> ・入試が近づき、 <u>プリントを欲しがる子どもが増えた。</u>
⑤分析・考察	・既習事項の数学的な言葉の意味の確認をすることで、今学習していることの理解を深めやすくする。	〈第 3 回埼玉テストより〉 ・定期テストに出題している類似問題の校内の正答率が <u>全体の正答率を上回ったものがあり、一定の成果が出た。</u> ・ <u>100 点を取る生徒など、高得点の生徒は応用プリントを積極的に解いていた生徒であった。</u> ・底辺層の底上げがうまくいかない。 〈普段の授業〉 ・頭の中の引き出しを多くする、武器を増やすよう指導すると、 <u>それを使って解こうとする底辺層の子が増えた。</u> ・問題演習の時間も必要不可欠。その時間とみんなで考える時間の両立が難しい。
⑥改善策を	・発展的演習プリ	・授業を受けたいと思わせることがカギだと考える。ネッ

まとめる	ントを作成し、取り組ませる。	トで何かを調べると、ついつい違う添付先に飛んでしまうことはよくあること。全然関係ないことでも何か知りたくなってしまふ。“ <u>知りたい欲</u> ”、これを授業に活かせないか、授業に価値づけさせるためにどうしたらよいかを考えている。
------	----------------	---

実践、分析・考察、改善策を見ると、「教える」という立場・考え方から、生徒に「考えさせる」、生徒の「学びたい」という言う意欲に火をつけることを意識して取り組んでいることがよくわかる。学びの基本は、生徒の「やる気」である。解ける喜びを感じさせ、生徒同士の学び合いを実践したことで、一定の成果を感じることができたのは、教師にとっても生徒にとっても非常に大きなことである。

## イ メンターチームの活用



### 【第一回メンターチームの様子：6/1 (金)】

本校は、年度当初の人事異動により 1 4 名の教職員が抜け、新たに 1 2 名の教職員を迎えた。教職員の資質能力向上には、数少ない中堅・ベテラン教職員が多くいる若手教職員を育てていくことは必要不可欠である。初任者から採用三年目までの若手教職員を対象に、月一回、放課後の一時間を使って教材研究や学級経営、生徒指導や保護者対応などについての悩みや取組内容の情報交換を行った。

### ウ ベテラン教員のサポート

本校には、再任用教員を含めて 21 年目以上の教員が 8 名いる。ふらっとさんかんやメンターチームを通して、これまでの経験を活かした適切なアドバイスを行うことができた。特に学年内での若手教員とベテラン教員の双方向の学び合いの場面が多くみられた。

### ③ マインドマップの活用

マインドマップについては、4 月当初に 1, 2 年生を対象に演習を一時間ずつ実施した。(3 年生は昨年からは活用を始めていたため実施せず)



### 【第 2 学年マインドマップ講習：4/17 (火)】

また、校内研修で本校教職員にも演習を行い、授業や業務整理等での活用方法を学んだ。以下は 1 1 月に実施したマインドマップの活用についてのアンケート結果である。

・マインドマップの活用についてのアンケート

1 マインドマップを教科や道徳、特別活動等で活用する機会がありましたか？該当するものに○をつけてください。

項目	I (1~10年目) (名/19名)	II (11~20年目) (名/4名)	III (21年以上) (名/4名)	合計 (名/27名)
機会があった	10	2	2	14
機会がなかった	9	2	2	13
合計	19	4	4	27

**マインドマップを活用する機会があった方にお聞きします。**

2 活用した教科等は何ですか？該当するものに○をつけてください。(複数回答可)

教科・領域等	I (1~10年目)	II (11~20年目)	III (21年以上)	合計
国語	1	1	1	3
社会	1	1		2
英語	2			2
美術	1			1
技術	1			1
家庭	1			1
道徳	5	1		6
学活	4	1	1	6
学校行事	1	1		2
生徒指導	1			1
教育相談	2			2
部活動	3			3
業務整理	2	1		3
合計	25	6	2	33

3 マインドマップを活用した感想を具体的に聞かせください。

**先生の手ごたえ**

例：研究授業の指導案を書くときに、発問を整理することができた。単元のまとめに活用できた。

国語	単元のまとめに活用。文学=人物の心情を言動から捉える。説明=まとめやキーワード毎に整理。 ・国語の授業で、マッピングをして活用しました。イメージを広げるのに有効でした。
社会	既習事項のまとめをわかりやすくすることができた。結果、個々の能力が一目でわかった。 ・「どんな課題」を「どう解決するか」を考えさせる際に活用した。生徒のノートはすべてマインドマップで作成した。
英語	教科書本文の内容をコンパクトに伝えることができた。 ・一年前から教員が作成したマインドマップを用いて生徒が音読しています。とても意欲的に取り組み、「日本語→英語」への転換機能や語句のかたまり、英語の語順などを教え込み、アウトプットできた。
美術	生徒の思考を一目で理解することに役立ち、机間指導の手間を最小限におさえることができた。
技術	授業の流れが一目でわかるので助かった。 ・授業で考えを広げる時とまとめる時どちらも使いやすかった。
家庭	授業で活用したが、自分自身がうまく作成できず、あまり有効ではなかったと思われるので、もう少し自分に研究が必要。
道徳	生徒が何を感ず何を考えているのかがわかりやすくなった。 ・道徳では自分のことはとても描きやすい。
学活	クラスの成果、課題を挙げ、学期の目標、行事の目標につなげることができた。 ・様々な意見が出るようになった。「何を書けばいいの？」的な生徒が減った。
部活動	部活動の成果や課題を挙げる時に、つながりを意識して整理することができた。

**生徒の様子 どう変容したか**

例：作文が書けるようになった。根拠をもとに発表できるようになった。

国語	大きな変容はつかめていないが文章全体を俯瞰することが少いできるようになってきた気がします。 ・言葉から言葉へとイメージを広げることができた。全体を俯瞰することで中心語(「根」)が背負っているものとして考えられた。
社会	自分の考えを自由に表現できるようになってきた。間違ふことを怖がらずに表現できる生徒が増えた。歴史を「自分たちごと」として捉えることが少いようになった。
英語	教科書本文の内容の理解が深まった。

・教科書本文の暗記につながった。
・単元のまとめをマインドマップで作成し、発表させた。10文以上の英文を自作したマインドマップを用いてスラスラとアウトプットできた。テストにも良い影響。描いたりアウトプットしたりしたものは覚えていた。
美術・制作する作品のテーマを具体的に考えられるようになった。
道徳・頭の中が整理されているようでいつもより意見が出ていた。
学活・個人新聞を書く場面では、マインドマップを描いたことによって文章を書けるようになった。
・イメージができていく(社会科の授業のおかげ)ので、取り掛かりも早く、つながりを意識した成果、課題を挙げる事ができていた。

4 マインドマップの今後の活用の仕方について、どのように活用していこうとお考えですか？該当するものに○をつけてください。(複数回答可)

\*なお、今後ご活用の予定がない場合には、その他の欄に理由も含めてお書きください。

項目	I (1~10年目)	II (11~20年目)	III (21年以上)	合計
業務整理	5	1		6
教材研究	5	2		7
学年・学級経営	3	1		4
生徒指導	2			2
教育相談	1			1
学校行事	2	1		3
部活動	1			1
合計	19	5		24

**マインドマップを活用する機会がなかった方にお聞きします。**

5 活用する機会がなかった理由は何ですか？該当するものに○をつけてください。(複数回答可)

項目	I (1~10年目)	II (11~20年目)	III (21年以上)	合計
具体的な活用方法がわからない	6	1	1	8
合計	6	1	1	8

**その他**

国語	単元上、使用する時間が確保できない。学級内では推奨する場面を設けた。
英語	現時点では活用していないが、今後スピーチをするときに活用したいと思っています。
理科	実験の考察をする際には横の広がりよりも縦のつながりを重視しているため。今後課題に対する解決策や実験方法を考えさせるために使うことができるかもしれない。 <b>疑問-実験-結果-考察</b> ・授業内で使う時間がない。勉強の振り返りで使ってもよいとは指導している。 ・理科で活用するとしたら、考察の部分等で使えらと思うが、授業数にゆとりがなく、時間がかかるイメージのため活用に至らなかった。
音楽	活用する単元(タイミング)と、根っこ部分を自分の中で何を置くのかよく考えなければあまり意味がなくなるのかなと思ひ、この足を踏んだ形。来年度前向きに考えたい。

**・アンケートの結果から**

教職員全体のおよそ半数がマインドマップを活用する機会があったと回答した。活用した教員の感想を見ると、イメージを広げることや、内容をまとめることに手ごたえを感じているようである。実際に、マインドマップを描いたことによって文章を書けるようになったり、自分の考えを自由に表現できるようになったりした生徒が増えた。マインドマップを活用する機会がなかったと回答した教員の理由としては以下の二つが挙げられた。①「授業時間にゆとりがない」②「自分自身(授業者)がマインドマップについてしっかりと理解していないため」である。今年度は、教員対象のマインドマップ講習は一回しか実施できておらず、授業で活用するための知識を身につけるには時間が足りなかった。また、教科の特性によって授業で活用しやすい教科とそうでない教科にも分かれた。国語や社会、道徳等、心情を考えたり文章をまとめたりすることには効果が得られているが、理科や数学では、授業

でどのように活用してよいか見えてこなかった。

ただ、多くの教員が手ごたえを感じており、生徒の変容もみられている。次年度以降も継続して研修に取り組む価値は十分にあり、その中で得られた成果や課題を教員の授業力向上へつなげていくことが大切である。

#### ④ 年二回のアンケートの実施・活用

教員の授業力向上をねらいとして、東部教育事務所作成の「よい授業のポイントチェックシート」と三郷市教育委員会「三郷の授業づくり」振り返りチェック10を7月と11月に実施し、結果を校内研修で振り返った。また、2月5日に実施された東部教育事務所教育支援担当訪問での全体会でもまとめを行い、指導者の先生方からも指導をいただいた。

### 8 授業力向上に係るアンケートの調査結果

今年度、授業力向上に関するアンケートを7月と11月の二回実施した。(キャリア段階Ⅰ：19名、Ⅱ：4名、Ⅲ：4名の計27名がアンケートに回答)以下は、その結果である。

#### よい授業のポイントー授業づくりのポイント「チェックシート」

視点	No.	内容	チェック
生き生きとした授業づくりの前提	1	教師間で連携を図り、教材・教具を工夫している。(共同で教材研究、情報共有等)	
	2	学習規律(時間、挨拶、話し方、聴き方、学習用具等)を徹底している。	
	3	学級に肯定的、共感的な人間関係がはくまれている。	
	4	既習事項の定着度を把握している。(レディネステスト、アンケート、家庭学習等)	
指導過程や授業改善の工夫・改善	5	導入の工夫 導入の工夫 端的な動機づけによる学習課題の明確化、学習意欲の向上	
	6	「日常の生活場面からの問題提示」「驚きや感動を与える導入」「既習事項との関連」「習得した知識・技能の活用」に気付き導入等により学習意欲を喚起している。	
	7	「追究したい、解決したい」という必要感が持てる課題を設定している。	
	8	体験的・問題解決的な学習活動を設定している。	
	9	自力解決の時間を保障し、児童生徒に自分の考えをもたせている。(自分の考えがもてるように個別の指導・支援を行っている。)	
	10	言語活動の充実(話し合い、討論、論述、レポート作成等)を図っている。	
	11	「主体的・対話的で深い学び」を意識し、目的に応じたペア学習、グループ学習、協働学習等、児童生徒の主体的・協働的な学習形態を設定している。(その目的や行い方を丁寧に指導している。)	
	12	児童生徒の思考を促す発問や理解を深める発問を工夫している。	
	13	端的に分かりやすい指示を心掛け、板書とリンクさせてノート指導を行っている。(本時の学習の流れ、思考の流れが確認できる板書を工夫する。)	
	14	本時の評価規程に準拠した指導と評価を繰り返している。	
終末の工夫 本時の学びの振り返り 身に付けさせるべき力の定着	15	本時の目標(ねらい、めあて)に即した学習の振り返りを行っている。(自分の言葉で本時のねらいに即した学習のまとめを書かせたり、発表させたりしている。)	
	16	本時に身に付けさせるべき知識や技能等の習得状況の確認を行っている。(適用問題等を行い、その時間に学んだことはその時間の中で定着させている。)	
	17	次時以降の予告をし、今後の学習活動の見直しをもたせている。	
	18	単元・題材の評価規程を設定し、各観点のバランスのとれた評価計画を作成している。	
評価に関する工夫・改善	19	学習活動に即した具体的評価規程を設定している。	
	20	評価結果の蓄積(補助簿の活用)から児童生徒の学習状況を把握し、次時以降の授業改善に生かすとともに、個別の指導・支援を明確にしている。	

【実施アンケート結果】**白抜**は7月から上昇した項目

項目	Ⅰ (1~10年目) (19名・%)		Ⅱ (11~20年目) (4名・%)		Ⅲ (21年以上) (4名・%)		合計 (27名・%)	
	7月	11月	7月	11月	7月	11月	7月	11月
①	79%	84%	75%	50%	75%	75%	78%	78%
②	95%	100%	75%	75%	100%	100%	93%	96%
③	79%	100%	75%	75%	100%	75%	81%	93%
④	58%	74%	50%	75%	75%	75%	59%	74%
⑤	89%	100%	100%	100%	100%	100%	93%	100%

⑥	79%	89%	100%	100%	50%	50%	78%	85%
⑦	42%	42%	100%	100%	100%	50%	59%	52%
⑧	79%	89%	100%	75%	75%	50%	81%	81%
⑨	79%	95%	100%	100%	75%	100%	81%	96%
⑩	79%	89%	100%	100%	75%	75%	81%	89%
⑪	89%	95%	100%	100%	75%	100%	89%	96%
⑫	53%	84%	75%	75%	75%	75%	59%	81%
⑬	74%	74%	75%	50%	75%	50%	74%	67%
⑭	42%	79%	75%	75%	25%	75%	44%	78%
⑮	79%	89%	75%	100%	50%	75%	74%	89%
⑯	68%	68%	50%	25%	75%	75%	67%	63%
⑰	68%	89%	100%	100%	75%	75%	74%	89%
⑱	63%	68%	75%	75%	50%	75%	63%	70%
⑲	42%	63%	100%	100%	50%	75%	52%	70%
⑳	63%	68%	100%	100%	75%	75%	70%	74%

#### ・アンケートの結果から

質問項目②学習規律⑤学習の見通し⑨自力解決の時間の確保⑩主体的・協働的な学習形態の4項目は、7月のアンケートと比べても達成率が特に上昇し、多くの教員が取り組んでいる。②学習規律について、本校の生徒は落ち着いて授業に取り組むことができおり、授業規律は徹底されている。ここ数年の間「三郷市授業の心得10か条」、2分前着席・1分前学習等、日頃から意識して取り組んでいる成果だと考えられる。⑤⑨⑩については、本校の研修課題である「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業が実践されている成果であると考えられる。⑤については、一時間の授業の流れを黒板に示し生徒にわかるようにしている。⑩については、教員ごとに、工夫した実践(グループ活動、ディベート、PREP(S)法を活用した発表)が多くあった。生徒が前のめりになるような「問い」を工夫し、「活動あって成果なし」とならないよう、注意していく必要がある。

質問項目⑦必要感がもてる課題⑬板書とリンクさせたノート指導⑯評価基準に準拠した指導・評価の3項目は、これからの課題と捉えている。⑦について、全20項目中最も課題と捉えている教員が多い。本校生徒の課題は「学習に対する意欲・やる気」であると考えられる。授業中も騒がしくなるなどの問題行動はないが、自ら課題と向き合い「前のめりに」学びに向かう姿勢とは言えない現状がある。生徒が「もっと学びたい」「知りたい」「なぜそうなるのだろう」と思える課題の設定が必要である。⑬については、生徒の自由な発想を促したり、主体的に学んだりする観点から、ただ板書を写すだけというノート指導(板書=ノート)ではなく、自分の考えや疑問をメモする形にも取り組んでいる。⑯は評価に関する内容である。特にキャリア段階Ⅰの教員が課題と捉えている。中堅・ベテラン教員から評価について学ぶ機会を意図的に設けたり、ふらっとさんかんを通して学んだりすることが必要である。

全体を通して、若手教員の意識が非常に向上(20項目中17項目で上昇)したことが分かった。アクションリサーチシートを定期的に作成したことがこれらの結果につながったと考える。

